

乃元道

11

あま

——小唄との出会いは。

稲舟 たまたま実家の隣に芸妓さんが住んでおられ、三味線や小唄のお稽古に接していて、ものごころつく前から口ずさんでいたようです。二十一歳の時、会社の同僚が先代の家元に小唄を習うことになり、付き添って伺ったのが、小唄の道に入るきっかけでした。

初心者にとって定番の「お伊勢参り」は、最初のお稽古で唄えませんでした。二、三カ月もすると、小唄の虜になり、入門から二年程で、師範として教室を開くよう勧めら

れました。昭和四十年のことです。

その後もいろいろ後押ししてくださり、四十一年、NHKラジオの邦楽の新人紹介番組の出演を果たしました。

以来同局の「邦楽のひとつとき」「今日の邦楽」といった番組への出演が続いています。

——どんな方がお稽古にこられますか。

稲舟 小唄は旦那衆のたしなみでした。単なる遊びではなく、粋とかセンス、品格を磨く芸ですね。私が師範になった頃は、社長さ

んはもとより、管理職になったばかりの方々もいらっしやいました。接待には「春夏秋冬」八曲、「季無し」二曲を唄えればよかったです。

——今では耳にする機会が少ないですが。

稲舟 そこで私が始めたのが「視る小唄」です。唄

と三味線で構成される本来の小唄だけでは、唄われている物語の筋や情景を想像することが難しい。それを補うには、舞台装置や照明、効果音を駆使し、踊りや所作を加えた演出で小唄の世界を楽しんでもらうのです。

三、四年に一度の「稲舟派記念公演」や「小唄リサイタル」などで上演したところ予想外の反響で、「愛知県芸術文化選奨文化賞」、「名古屋市民芸術祭審査員特別賞」をいただいています。

——ほかに取り組んでいることは。

稲舟 中学校へ出張授業に赴いたり、金城学院大学の留学生には三味線を教えたり、ハワイの大学などでも講演と出張授業を行っています。そのほか、『源氏物語』を題材にした新曲づくりや、まどみちおさん、谷川俊太郎さんらの詩に曲をつけた新作も発表しています。

五月に開く「稲舟派創立五〇周年記念公演」では、その集大成をご覧いただけると思います。

小唄稲舟派二代目家元
稲舟妙寿

視る小唄で

新しい世界を演出

